
無題

kaz

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題

【Nコード】

N2141Q

【作者名】

k a z

【あらすじ】

人生に価値観を見いだせない主人公が、一人の少女と一緒に人生の大切さを見つける。

無題（前書き）

処女作です。 他のところにも投稿しています。

無題

無題。プロローグ

『じゃあ明日の10時にいつもの場所で。』
分かってる。何回目だ。

『じゃあね。』

俺も別れの挨拶をしようと思ったたら一方的に切りやがった…

「誰からの電話？」

3つ下の弟がいつもと同じように冷淡な口調で訪ねてきた。

「友達からだよ」

俺も同じように冷淡な口調で答える。

まったく、弟よ。この前まではべったりしていたのに、中学校に通信始めた途端これかよ。

無題。 無題1

『早く起きてー！』

近所迷惑になりそうな…多分なっているだろう大きな声でオフクロに起こされた。

いつもと変わらないエプロンに、まだ調理途中なのだろうか、さえ箸を持ちながら俺の部屋へ侵入する。

「起きてるなら早く食べないと遅刻しちゃうよ！」

やはり近所迷惑な大きな声で怒鳴られた。

「今行く…」

眠い目をこすりながらいつもと変わらないキッチンへとオフクロの

あとを追っていく。

「遅かったね」

ニコニコと笑いながら弟が話しかけてきた。

「妙に早起きだな…」

続けて、どうしたんだ？と言いつつになるところで口を止める。

ああそうか…今日は入学式か…

これといって勉強を頑張った訳でもなく、だからと言って勉強を全くしなかった訳でもないのだから、偏差値50前後を毎年往復するよ
うな高校へ入学した。少し距離的に遠いが…

多分、何事も目立たない俺には丁度いいのだろう。

テストの点数も平均点とあまり変わらず、なにかのリーダーやなん
とか長になる事も無く、顔立ちもなにもかも…平均だ。

そう、俺は平均なのだ。

もしも全人類で全人類オリンピックや、全世界一斉学力調査テスト
なんてもんをやったのなら多分俺はすべてにおいて平均を取る自信
がある。もしも俺が一位なんぞという物をとってしまったら、びっ
くりして俺の心臓が爆発する…その前に地球の火山がすべて爆発す
るだろう。

…なんて事を考えながら、入学式の準備が整っているであろう学校
への道のりを歩いていく。なぜか少し早歩きになる。こんな俺だっ
てワクワクするさ、今日で晴れて高校デビューだ。

高校へ着き、最初に待っていたのは桜並木だ。さすが春…と言った
ところだろうか。そして入学式が行われる体育館へと足を向ける。
入学式といっても入学する俺らが何かをする訳ではなく、校長の眠

気を誘う声を聞かされたり、部長の部の宣伝を聞かされたり…と、俺らはもしかしたら要らないんじゃないか？なんて思ってしまった。最後に学年主任の無駄に熱い目標を聞いて初めての教室へと行く。

教室は1 - 5組。全部で8組あるらしい。俺らの学年から入学する人数を多くしたみたいだから他の学年は7組までみたいだ。そして初めての自分の席へと座る。そして…やはり自己紹介を最初にやるらしい。

名前順で座らされた席だから毎回『あ』から名字が始まる奴はかわいそうだな。なんてことを考えながら自分の番を待つ。

どうでもいいうんちくを話す奴や、教室の空気が死んでしまうようなギャグを発表するような奴がいたが、俺は自分の名前と出身校だけ答えた。

嘸まずにテンプレートな自己紹介ができたなあと自分を褒めようと思っていたときに彼女はいた。

俺の二つ後ろの席。小さな女の子だった。

「傘紗 からかさ すい 翠雨大沼東高校出身 よろしくお願いします。」

俺と変わらない簡単な自己紹介をおわらし席へ座る。次の奴が自己紹介を始め普通に自己紹介が続けられる。しかし俺は不思議なオーラを彼女から感じた。名前が珍しいとかじゃなくって、なんだか俺と似た雰囲気だった。

見た目は身長は小さくて、短めの銀と青の間の色の髪に整った顔。

なんといつても…無表情だった。

無題。 無題2

入学式は午前中で終わり昼の少し前に帰れる。

初日だから一緒に帰れるような友達も無く、一人で帰り道を歩いていた。と、そこに一人の少女が飛び込んで来た。

身長は少し高めで…俺よりは小さいが。少し長い黒髪の毛を一つに結んでいる。それにスタイルはいいし、冬服（春だけどまだ夏服じゃないんだ。）がとても似合っている。見た目は清楚な感じなのだ。「ひっさしぶりー！何年ぶりかな？覚えてる！？」

忘れない…いや忘れられない。一つ上の学年で小さい頃同じマンシヨンに住んでいた『大空 珠晴（おおぞら みはる）』さんだ。元気だけが取り柄といったら悪いが本当に、本当に元気だった。誰とも仲良くでき、リーダー的な存在だった。しかし、地元のガキ大将を泣かせてしまうし、すぐ悪戯をして怒られていた。

どんなに頑張っても本当に記憶に残る方だった。

しかし、小さい頃に俺が引っ越してしまったからすっかり忘れていた。そういえばこの高校へ行くと言っていた。

「お久しぶりです。大丈夫、覚えてますよ」

いつもよりも少し笑顔で…もしかしたら苦笑いだったかもしれないが答える。

「それならよかったよっ！入学式の時、前にいたのに気づかなかったみたいだから、忘れられてるかと思ったよ」

体育館にあるような、ちっぽけな照明よりもぜんぜん明るい笑顔で胸を撫で下ろす。

「すいません。全然気づきませんでした」

すこし驚き。そして照れながら答えた。 本当に気づかなかった。

「部活動紹介の時だよ！私バレーボール部の部長だったんだよっ！」部活紹介の時は、残念ながら丁度眠かった。続けて話した。

「今年は三年生がいなくてね。仕方ないから私が部長なんだ！だから部活動紹介張り切ってたんだよ」

胸を張って話す。しかし少し悲しそうな顔をしていた。

「部員が少ないと大変そうですね。でも部長ってすごいじゃないですか。」

「でしょー！」

即答だった。

どうしてこの人はこんなにも胸を張っていられるのだろうか。どうしてこんなにも自分に自信を持てるのだろうか。

今の俺にはどうしても理解できなかった。

少し昔話をしたあと『じゃあねー！また明日っ！』と手を振っていた。

俺は笑顔で手を振りかえした。

なんというか…彼女には『なにか』があつたのだ。俺には無い『なにか』が。

さっきと同じように『なにか』について考え始めるが結局結論にたどり着けない。

難しいことを入学初日から考えるのは良くないと思ひ考えるのを止めた。

そして電車に乗るため駅へ向かった。

無題。 無題3

入学式を終えたばかりの俺にこれは無いだろ…アホか！

心で叫んだ。もし公共の場で叫んだら怒られるからな。

しかし、本当に叫ぼうかと思った。電車が満員なのだ。それもバカ

みたいに…。

下手したら窓が割れてそこから人が漏れ出てしまつのではないだろうか？本当に心配した。鳥肌が立った。

そのくらい満員だった。しっかりと次の駅へ進んでいるのが不思議なくらいだ。

…そこで原因を考える。

平日の昼前の時間なんてそこまで混まないだろ？まだサラリーマンやOLなんかはギリギリ働いている時間だ。

他にも考えたら入学式の帰りの生徒や保護者が思いついた。…いやそれはない。

混むのなら逆側の帰り道が混むはずだ。なんたって俺の家は学区ギリギリにある。しかも他の生徒がいる方向とは真逆の方向だ。友達と遊ぶのに俺の家は不向きであろう、遠すぎる。それを証拠に同じ高校の生徒の姿は少なかった。なんだか悪寒がした。

考えても無駄みたいなので次の駅で電光掲示板でも見る事にした。

【人身事故】

と表示されていた。ちなみに乗った駅から次の駅だ。人身事故と言っても人が轢かれるとかだけでは無く、線路への落とし物や人が原因で電車が止まる事を人身事故と定義する。俺の親父が電車オタクで良かった。

つまり、人身事故が起こりそれが原因で電車が止まってしまっていたみたいだ。そして俺が乗っているこの電車が事故後初めての電車みたいだ。なぜか寒気がした。

原因が人身事故なのは分かったが詳しく知りたい。一回電車から降りて、近くの駅員へ聞いてみる事にした。

こんなに行動を起こすなんて、なんだか俺じゃないみたいだ。しか

し人事ではない気分だった。

乗った駅から3つめの駅で駅員をさがす。

「すいません」

弱々しい声で声をかける。駅員に話しかけるのなんて初めてだ。

「どうしましたか？」

忙しそうだったが笑顔で答えてくれた。

「こんなに酷くなる人身事故ってなかなかないですよ？ どうしたんですか？」

なんだか恥ずかしい。

「僕もよくわからないんだけど一つ前の駅で、猫が線路に入り込んでしまったみたいだね。それを高校生の女の子が助けにいった……」

「……その女の子はどうなったんですか？」

「大丈夫だよ。周りの人が近くの駅員に報告したみたいで、その電車で連絡したら電車が止まってくれたみたいだね。」

胸を撫で下ろす。変に力が抜けた。

「そうですか。ありがとうございます。」

一礼する。俺は何を聞いていたんだろうか？何がしたかったか分からなくなる。

もう帰ろうかと思ったが俺がおりる駅まであと5つあるのだ。疲れた体に満員電車はもう止めてほしかったから駅から出る事にした。幸いこの駅にはショッピングモールと呼ばれるものがあつたからちようどいい。ファミレスくらいあるだろうと思ひあたりをうろつく。そこへどつかで見た事がある小さな女の子がいた。

小さな背丈に、短めの綺麗な髪の毛。それに……小さな黒猫を抱えていた。

無題。 無題 4

駅からショッピングモールへと繋がれている通路。なぜか人通りが少ない。

「……………どうしたの？」

おいおい……こっちの台詞だ。

「そっちこそどうしたんだ？入学したばかりなのに泥だらけじゃないか。」

「これは……」

少し戸惑った様子で答えた。

「……転んだの」

嘘付け。さっきまでの三点リーダーはなんだ？

「猫はどうしたんだ？」

「……………拾った」

やれやれ……こいつは嘘が苦手らしい。それにこの黒猫を助けた事を秘密にしたいらしい。

「そうか」

秘密にしたいみたいだからあまり追求しないことにする。……………腹減ったな。

そついや誰かが猫を助けた代償に電車が止まってんだったな。ふと時計をみた。 14:20……

「飯は食ったか？」

突然だが聞いてみる。

「……まだ」

申し訳なさそうに答えた。

「俺も実はまだなんだ。近くにファミレスでもあるかな？良かったら一緒にどう？」

恥ずかしい。死にそうだ。

「そう…行く…」

良かった。これで行かないとか無表情で言われたら入学早々登校拒否になるところだった。

「ここら辺はくわしくないんだ。どこにあるか知ってる？」

ほぼ初対面女子とこんな話すとは…

「こつち…」

ついてきて。と言わんばかりに先に行く。俺の隣は嫌らしい。

ふと思う。どうして声なんて掛けてしまったんだろうか？なぜ一緒に飯を食おうなんて言ってしまったのだろうか？

今日の俺はなにかがおいしい。

歩いてしばらくした。彼女は黒猫を大事そうに抱いていた。よほど猫が好きらしい。

「猫が好きなのか？」

また声を掛けてしまった。

「…そうでもない」

え？なんて言った？

「私に…似ていたから」

猫をぎゅっと抱く。続けて

「この猫、一人でいた。それに…何かに追われているようだった。多分…電車だろうか？」

「なるほどね…」

よくわからなかったが答えた。

「…あなたは」

戸惑いながら続ける。

「あなたは…どうして私に声なんて掛けたの？」

なんでだろうか？…わからない

「上手く言葉にできないけど…多分傘紗さんがその猫を助けようと思ったのと変わらないと思う。」

自分で言ったくせに意味が分からなくなる。

「私と同じ?」

「そうだな。傘紗さんが俺と似ていた気がしたんだよ。」

否定しないさ。多分最初にあったときも俺に似ていた気がしていたんだよ。

「私に……」

無表情ながら少し考える素振りをした。

ファミレスに着くまで二人の間を沈黙が支配した。

無題。 無題5

もしも今、一つだけ願いが叶うなら俺は話題をくれ!…と神に頼んでいるだろう。てか今頼んでいる所だ。

ファミレスに入ったのはいいのだが、沈黙の野郎が襲ってきやがる。

「そういえばさ、猫に名前とかつけないの?」

焦りながらも愛嬌をいっぱい振りまきまくった。しかし

「…考えとく」

一瞬だ。俺が一生懸命考えた話題が一瞬で破壊される。

どうすりゃいいんだ? 助けてくれ神様。

「…そういえば」

珍しく彼女から話しかけてきた。

「あなたはどこに住んでいるの?」

いきなりだな。

「こっから5つ目の駅の近くだよ。空高駅あきたかって知ってる?」

話題を広げようと頑張る俺。

「…知ってる」

負けまいと俺が続ける。

「傘沙さんはどこに住んでるの？」

「空高駅の近く」

おい。待て待て

「え？」

「あなたの事は何回か見た事ある」

え？なんだと？

「あなたの事を見るたびに楽しそうにしていなかった」

淡々と続ける。

「あなたを見た時私に似ていると感じた」

あいかわらず無表情だな。

「…それにあなたと話したいと思っていた」

その顔は照れているのか？待てこっちも恥ずかしいぞ。

「そうか…」

他にもなんか言えよ、俺！

少し考えようか。

俺と彼女の家が近くて彼女が俺の事を見た事がある？

俺は記憶に無いぞ。彼女の事を見たら多分オーラで気づくだろう

し覚えているだろう。

そして…俺に似てると感じた？それに俺と話したいだと？

どこの物好きだよ…

また沈黙が襲う。

さっきまでは注文していたステーキを食べてたから気まずさが紛れたが、今は何も無い。携帯をいじりだすのはチョットな…

…と思った瞬間俺の携帯が愉快的な音楽をならし始めた。

続く

無題（後書き）

続きます。 時間があれば…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2141q/>

無題

2011年1月19日01時50分発行